
ふたりだけの軍隊

猫凹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりだけの軍隊

【Nコード】

N0907Z

【作者名】

猫凹

【あらすじ】

上官一名と部下一名。たった二人だけの部隊は、成功率の限りなく低い作戦に、果敢に挑む。その秘策とは！？（2ちゃんねるの創作発表板「小説家になろう」で企画競作するスレPart3（<http://yuzuru.2ch.net/test/read.cgi/mitemite/1319658024/150>）での企画参加作品）

二人の兵士は、その茂みに身を伏せて息を殺し、待っていた。

「隊長、獲物は本当に来るんでしょうか」

「必ず来る。サーを忘れてるぞ！」

「サー。失礼しましたサー」

既に一時間が経過していた。彼らにとっては決して短くない時間である。

「サー。退屈してきましたサー」

「任務に退屈もクソもあるか！ 演習じゃなんだぞ！ 給料分は仕事しろ！」

「サー。あの給料ではあと一時間が限度ですサー」

「贅沢言うな！ まったく最近の新兵は！」

作戦の成否次第で、彼らの将来は大きく変わるはずである。

「サー。何を考えてるんですかサー」

「オレ、この作戦が終わったら……」

「サー。それはフラグですサー」

「ふらぐ？」

「サー。知らぬが仏ですサー」

「なんだよそれ！ 教えろよ気になるだろ！」

二人の目前、数メートルの距離には、獲物を待ち受けるブービートラップ。

「サー。あのトラップは信用できるのですかサー」

「話したろ。昨日、獲物があれに引っ掛かったのをオレが見ている」

「サー。その時に獲物をしとめれば良かったのではないですかサー？」

「それも話した。妨害が入ったのだ」

「サー。それで手をこまねいて見ていたのですかサー。いくじなしサー」

「うるさーい！」

更に無為に待つこと数分。部下は地図とコンパスを見比べ、眉根を寄せて質問する。

「サー、自分はこのあたりは不案内ですが、何か変じゃないですかサー」

「何を言う。オレの作戦に万事ぬかりはない」

「サー。獲物が来る方向は正面で間違いありませんかサー？」

「間違いない。獲物はこの時刻、この地点を北から南に向かって通過する」

そしてあらわになる、作戦のほころび。

「サー。申し上げますが……」

「ん？」

「コンパスによれば、北は正面ではなく後方ですサー」

「な……なんだと!？」

「あら。丁奈ちゃん、丙太くん。こんにちは」

よもやの奇襲！ それは、待ち伏せ地点の背後から二人に訪れる。

「あつ。こんにちは乙美おねえちゃん」

「うわっ！」

「ふふ。どうしたのそんなところに隠れて。誰かを驚かそうとしてるのかな？」

「うん。乙美おねえちゃんを待ってたの」

「え？ 私？」

「うわっ！ バカっ」

信頼していた部下の、突然の裏切り。

「丙太が、おねえちゃんが昨日あそこの折れた電柱の跡につまずいたの見てて」

「あら」

「おいだまれっ」

「甲一おにいちゃんが乙美おねえちゃんにバンソーコー貼ってあげてるの見てて、自分もやるんだって」

「えっ。そんなとこまで見られてたんだ」

「わーっ！」

「乙美おねえちゃんと甲一おにいちゃんがいいフンイキだったから、声をかけられなかったんだって！」

「やめろお！」

戦場では、無能な指揮官が背中を撃たれるのはままあること。

「もーやだなあ。別に私とコウはそういうんじゃないんだから」

「そそそ、そーですよね！ 甲一にいちゃんはただの幼馴染だって前に」

「サー。丙太ってほんとバカだよねサー」

「な、なんだとー！？」

「うふふ。何その『サー』って。卓球？」

「昨日テレビでやってた映画に影響されちゃったんですこのバカ。毎度付き合わされるのも楽じゃないです」

「なっ！ だからレアカードやったじゃねーか！」

「サー。あんなのたいしてレアじゃないですサー」

「ふたりは本当に仲良しなのね。これ以上お邪魔しちゃう悪いかな？」

「ちっ違うんです乙美さんっ！ こいつはただの部下でっ」

「サー。あんたはただのバカでしょサー」

「ばっ！ バカバカ言うな！」

「サー。丙太のバカ。バーカ。サー」

そして……決定的な第三の勢力の参戦……！

「よー乙美。あれ？ どうした丙太に丁奈ちゃんまで」

「あっ。こんにちは甲一おにいちゃん」

「わわっ！ まずい！」

「あれ？ コウ、部活は？」

「今日は顧問が急用で中止。まずいつて何だよ丙太」

「あのねー丙太はねー」

「うわーっ！ 撤退！ 撤退！」

かくして、作戦は瓦解。全軍敗走とあいなる。

「なんなんだあいつら……そういえば乙美、転んだのこの辺だったよな。膝はもう大丈夫か？」

「うん。絆創膏はまだ貼ってるけどね。何よ。コウがあんまりやさしいと気持ち悪い」

「そりゃお言葉だなおい！」

「あはは。……でもありがと！」

数刻の後、デブリーフィング。失敗に終わった作戦についての反

省検討会議。

「ちつくしょー！　なんでこうなるんだよっ！」

「サー。そもそも作戦に無理がありましたサー」

「うっ、いい作戦だと思っただのに……」

「サー。いくらうつかりな乙美おねえちゃんでも、毎日同じところで転ぶわけないですサー。」

「そ、そうかもしれないけど……」

「サー。だいいち、女の子が転ぶのを黙って見ておいて後から手当して気を惹こうなんてサイテーなんですサー」

「ぐっ……」

「サー。根性が曲がってるのですサー。そういう奴は永遠にモテないですサー」

「ぐぐ……」

「サー。そもそも丙太と美人の乙美おねえちゃんとじゃ釣り合うはずがないんですサー」

「ぐぐぐ」

「サー。バカ丙太がかっこいい甲一おにいちゃんに対抗しようなんてのがだいたい百年早いですサー。いや、永遠に早いですサー。身の程をわきまえてくださいサー。」

「いっ……言わせておけばあーっ！」

「わーいバカ丙太が怒った！」

ここにいたり、ふたりだけの部隊は破局を迎える。

「待ちやがれーっ！　レアカード返せっ」

「ごっここに付き合った報酬で貰ったんだから返さないよーだ！」

「何をーっ！　邪魔ばっかりしたくせに！」

「手伝わせる相手は選びなさいよバーカ！　丙太の唐変木！」

「とーへんぼくってなんだよ！　どーせ悪口だろー！」

「悪口に決まっでんでしょバカ！ 死んじゃえバーカ！」

夕暮れの街に、兵士の悲痛な叫びがこだまする。

「ちくしょおーっ！ オレの戦いはこれからだ！ 待っててよ乙美さん！」

「無駄なことしないで、しっかり周りを見て生きなさいよ！ 丙太のバカバカ！ バーーッカ！！」

（後書き）

セガールもいいけど、たまにはスタローンも思い出してあげてください……。

2ちゃんねる創作発表板「『小説家になろう』で企画競作するスレ」ではいつでも参加者を募集中！

まったり雑談から、辛口な批評のやりとりまで何でもあり。お話を書くのは初めてという方でも大歓迎！ ぜひ一度、お気軽に、覗いてみてください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0907z/>

ふたりだけの軍隊

2011年12月3日14時51分発行